



株式会社
キャンディッシュ・ヨミドリテクノロジーズ代表取締役
(沖縄振興開発審議会委員)

残間 里江子

何故、これほどまでに沖縄が好きにならなかったのか。できれば人生の終盤は沖縄で過ごしたいとそれで思っていた。

友人の何人かも同じように考えていて、中でも、「老後を楽しく過す友の会」のメンバーとは時々誘って沖縄に行き、「理想の場」探しをしてくる。初めて沖縄を訪れたのは返還の年の夏だった。女友達一人との気楽な旅でひめゆりの塔も首里城にも立ち寄らず、「一泊二日」若さにまかせてヒーチでひたすら肌を焼いていた。

そうはしてはいても、私の頭のどこかに反戦運動に熱心だった親に育てられた影響もあって、沖縄の人たちに対する「呵責」は否めなかつた。

女三人連れ立つて米軍払い下げショ

ツへ行き、軍服の古着や「バゲット・ウ

オッシュを買った時にはさすがに気が咎め、胸の奥底に小さな痛みが走った。

その後、女性誌記者時代に取材で行ったのも含めれば三十回ぐらいは訪れたところか。

行くたびに新たな沖縄のよさを発見し、家を買つのは無理でも、せめて毎年最低一週間は行ける身分でした。ものだと願つて。

そんな私からすると、沖縄には振興して欲しいような欲しくないような複雑な気持ちだ。

振興そのものを悪いとは言わないが、「時代」、「振興」とこのとくにしても産業経済と直結しての言葉に聞こえてくるので、何とはなしに抵抗を覚えるのである。確かに経済の伸長で解決のつくりこともあらうが、一律に着いた結果、魅力が平板になってしまった場所のなんと多い」とか。

沖縄は自然も景観もいいが、魅力の最たるものは「人」だと思つ。ここまでの約三十年、沖縄各地でいろんな人たちと出逢つてきたが、時間の流れ方が違うのが、大らかな人が多かつた。ガツガツもなければ「ヤヤクヤもなく、一緒にいるだけで気持ちが和らぐ人ばかり」だ。

地域創造に限らず、何をするにも基本は「人」だと思つ。全てをやり尽くしたかに見えるこの時代はなおの「人」という原点を見据えるべきなのではないだろつか。

沖縄を政治的、経済的に動かしている人たちと「振興」について話す時、基地問題やインフラ整備に代表される野太い議論が中心になつがちで、「人は後回しなつて」というような気がする。國の金瓶(かねがめ)が枯渇しそう

その後金を出せる状況ではない。今だからこそ、時代の価値観にフォーカスを当たた「人の想に中心」の施策が活きてるのだ。

「バブル崩壊以後、突き詰めると、人の心を動かしてるのは「不老長寿」と「自己実現」の二つである。

「不老不死」は無理でも、長寿」はその気になれば可能だ。百歳以上の人気が一万人を超えたあたりから健康不安が増大しているところの人間の性なのだ。生物体としてそこまで行けるのなら、あとはその人次第といつわけだから、その気にならた人は長寿のためにお金も時間も進んで供出するのである。

もともと「不老長寿」のための素材がいっぱい詰まつて、沖縄は「ウエルネス」や「メント」も盛んだが、高齢化の波との兼ね合いで、「健康」というアイテムをもつと本格的に捉えてみてはひつだ。

一方の「自己実現」欲求は、まだ見ぬ自分と出逢つたて、とくものだが、最近では見聞を広めるだけでなく、学んだことを他者に向かって表現した」とこつぶつに形が変わつて。いつした気持ちと、まだ拓ききつてはしない沖縄の歴史や文化を繋ぐ策も本氣で考えていい時期に来ているよつと思つ。

この先の人口動態から言つても、沖縄を若者ターゲットと決めてけず、「マジヨリティ」を構成しつつある「目利き」の大らかな「の楽園」になるよう時間とかけて創り上げてこつて欲し。